

明治13年前後の「殖産興業」の動きと津軽の藍について — 旧弘前藩士族長尾介一郎の日記から —

Descriptions of the Tsugaru Indigo in the Diary of the Hirosaki Samurai, Nagao Kaiichiro: Industry and Promotion Around the 1880s

北原かな子*・宮本 利行**・肥田野 豊***・北原 晴男***

Kanako KITAHARA*, Toshiyuki MIYAMOTO**, Yutaka HIDANO***, Haruo KITAHARA****

論文要旨

長尾介一郎は近代津軽地方の殖産興業に尽力した人物であり、彼の日記は近代青森の諸相を知る上で貴重な史料となっている。特に明治13年前後は、介一郎が県の勸業を担当したことから、津軽地方内での殖産興業の動きや製糖、藍についての記述が多く含まれる。これらは、従来ほとんど知られていなかった津軽藍に関する旧弘前藩士の具体的活動を知るうえで貴重なものであり、本稿は長尾日記を基にして、明治13年前後の津軽での藍への取り組みを明らかにしようとするものである。

はじめに

長尾介一郎日記は、1996年に、沼津市在住の津軽史研究者である兼松成一氏によって発見された資料である¹⁾。長尾介一郎（弘化2—大正3）は、弘前藩士長尾周庸の子息で、廃藩前は藩学校に関わり、廃藩後は中津軽郡役所や第五十九銀行などに勤務して士族授産計画にも参画するなど、津軽地方の教育及び産業振興に尽した人物であった。

教育については、明治4年の弘前藩学校設立時の貢献が知られる。明治4年1月、弘前藩では藩士育成のために藩外から4名の教師を招聘し、青森英学校及び弘前敬応書院を開校した。この時の教師招聘は、当時の弘前藩としては破格の高給をもって計画されたが、それでも人事はかなり難航した。当初白羽の矢が立った中村正直に固辞され、その替りに中村の推薦をもって宮崎立元、島田徳太郎を招くことになった。このとき、葛西音弥、梶昌雄と共に実際に静岡に出向いてその任に当たったのが、長尾介一郎であった²⁾。

また、旧藩学校を継承して明治5年に設立された東奥義塾でも教師を勤める一方³⁾、津軽地方で

の産業開発にも尽力した。たとえば、明治9年頃には、宮館村というところで発見された「紺青色」の土の分析も手がけたとされる⁴⁾。明治14年の農牧社設立にも関わり、乳業を手がけて「谷量舎」を創業、明治27年からは独立して乳業の振興に勤めた。

上記のように、弘前において社会の重鎮として活躍した経歴を持つ長尾介一郎が記した日記は、明治12年1月1日から大正3年3月14日まで36冊にわたって残されており、当時の社会事情を知るうえでもきわめて貴重な史料となっている。特に注目に値するのは、介一郎が明治12年3月1日付で中津軽郡々書記を拜命し、産業係事務担当となったこと、また翌明治13年4月17日に第二課勸業科の担当となったことから、明治10年代初頭の、津軽地方での産業化に向けた具体的な動きが細かくつづられていることである。これは、当時の士族が地域産業発展に向けた可能性を模索する過程を、その試行錯誤も含めて今に伝えてくれるものである。一方、筆者等は、これまでも廃藩後の県内士族授産の概況や津軽での藍産業化に向けた動きについて報告してきているが⁵⁾、たとえば、介

*秋田桂城短期大学

Akita Keijo Junior College

**青森県立五戸高等学校教諭

Gonohe High school

***弘前大学教育学部技術科教室

Department of Technology, Faculty of Education, Hirosaki University

****弘前大学教育学部自然科学教室

Department of Natural Science, Faculty of Education, Hirosaki University

一郎は、藍の開発にも関わっており⁶⁾、そうした視点からもきわめて興味深い記述を提供してくれるものでもある。以上のことから、本稿は明治12年から13年にかけての長尾介一郎日記を史料として、当時の産業振興の動きや、津軽藍を取り巻く状況について明らかにするものである。

明治12年の介一郎日記に見る産業振興の動き

明治12年には、1月3日から郡長笹森儀助と授産の打ち合わせをするなど、年頭から産業に関する活発な活動が行われていたことがわかる。本稿では藍を中心とするため、それ以外の動きについての詳細には立ち入らないが、たとえば、東奥義塾において生徒たちが結社を造り、シャボンの製造を行っていたこと⁷⁾、あるいは東奥義塾経営の中心であった菊池九郎等が、活発に開墾などに向けて動いていたことが伝わる。農業関係の雑誌などを購入して、情報収集にむけても熱心であった⁸⁾。義塾において葡萄移植の相談⁹⁾や開墾の相談が行われ¹⁰⁾、稲の除虫のための薬剤についても動いている¹¹⁾。当時、弘前の士族結社としては、明治11年10月設立の興業社があり、養蚕や製糸業がおこなわれていたが、その外にも製糖についても、動きがあったことがわかる¹²⁾。製糖については、器械購入を図り¹³⁾、伝習を行うなど¹⁴⁾、熱心であった。菊池九郎とともに出版の動きもあったようである¹⁵⁾。個人で製茶に取り組む者もあり¹⁶⁾、菊池九郎は甘藷も栽培していた¹⁷⁾。文字通り、さまざまな産業振興への試みが展開されていた中で、藍という文字がでてくるのは、年の瀬も押し詰まった明治12年12月20日のことである。

八時頃織田藤治下宿ニ来ル談時ヲ移シ十時過出勤六時退下 筆生佐藤要吉其貴家猪俣氏ノ舎弟病氣為出勤ナシ郡長笹森又青森へ行く旧藩ノ廃卒復禄ノ事ニ付五六年前ヨリ出頭候得共遂行シ給助金ノ事ヲ内務省前島密へ申込タル処好キ返答ヲ得県令上京起業ノ補助トシテ三万五千元十五ヶ年季貸下許可相成共後年賦返納ト言此頭取高屋利之ト言フ者ニテ杉山竜江大ニ輔翼セリトノ事起業ニ付テ種々難問モアリ且六百名余ノ取東方格別面会モノニ付県庁ヨリ予ト菊池九郎ト兩人ノ内へ委託ノ内命アレトモ種々ノ子細モアレハ之ヲ受ス勞ノ為郡長県令へ挨拶ヲ兼急ニ出張セルナリ。

齋藤元三郎郡役所ニ来ル¹⁸⁾開拓ヨリ買入ノ麻糸並藍葉ヲ借レ行ク

ここでは、「開拓ヨリ」とあるので、藍の葉が札幌の開拓使より入ってきてたことがわかる。なお、ここに出てくる内容は、同12年12月23日に35000円の貸付を受け、612名の士族で牧畜中心として結成された結社開拓社のことであろう。開拓社は後に牧畜から製塩と産馬に変更する¹⁸⁾が、結成当初、長尾介一郎と菊池九郎とが「委託ノ内命」を受けていたことがわかる。

こうして、長尾日記に登場した藍については、翌明治13年に入ってから、関連する活動が見受けられるようになった。

明治13年の長尾日記に見る藍関連の記述

先にも触れたように、介一郎は、明治13年4月17日に第二課勸業科を担当する辞令を受け取っている。藍に関する記述が出てくるのは、ちょうどその17日である。この時以降、明治13年の長尾日記には、藍に関する記述が頻繁に出てくるようになった。以下に、藍関連の記述を抜粋する¹⁹⁾。

4月17日

(前略)農事改良御用トシテ津軽各郡日数五十日積ヲ以巡回申付候事。又二課ニ在リテ藍栽培製造方教師ヲ藤崎へ出スヘキノ取調ヲナシ阿州徳崎町ノ人桑井貫二²⁰⁾ヲ喚出シ之ヲ申付アリ。(以下略)

4月18日

四時過成田保次郎戸長下宿ニ来ル藍教師取扱ノ事ヲ談ス。同人出レハ笹森勇太郎十等属ト同道シテ再ヒ来ル。桑井貫二²¹⁾藍教師取扱ノ事ニ付色々協議アリ。当村農清水利兵エヲ呼出同断ノ事ヲ談シ日暮笹森其外皆戸長役場ニ行村民篤志ノ者ヲ喚ヒ集メ右協議ノ為ナリ。(以下略)

4月19日

(前略)今朝笹森へ行途中成田保次郎ニ逢ヒ藍教師ノ事ニ付口々障述アリ。笹森ヨリ態夫ヲ以板野木杉山久兵エヲ藤崎ニ喚フ。藍教師据置ノ為ナリ。午後藤崎ニ来ル。本日吉村俊作ニ逆旅ニ逢フ。午後八時過藍教師桑井貫二並僕^(桑井ノ甥ニシテ士族ニテ吉田蔵ト云)

当村到着余力逆旅ニ至時笹森勇モ居合則兩人宿所

ニヤル後ニ余等其宿所ヲ訪ヒ藍ノ大略ヲ訪酒肴ヲ出シ十二時過下宿ニ帰ル。(以下略)

4月20日

藤崎村ニアリ八時桑井来テ下宿続テ笹森モ来ル。而シテ同村藍伝習有志ノモノ六七名来ル。桑井ヨリ藍栽培製造方ノ大略ヲ聞ク。得意ノ体アリ。午後村民退散桑井笹森共ニ午食シ三時過同村ヲ発シ四時過弘前宿所山野ニ投シ夫ヨリ郡役所ニ出当郡馬耕ノ状ヲ尋ネ下宿ニ帰り晩食終リ大道寺ヲ訪フ(以下略)

4月22日

(前略)係谷利三郎ニ藤崎ニ行藍教師ニ面会スヘキ事ヲ談シ(以下略)

4月24日

[三世寺村で](前略)戸長安田ヲ呼ヒ馬耕ノ事並藍仕立ノ事等ヲ問フ。相済退出藍教師桑井貫二並同行一泊アリ。面会シテ近日ノ景況ヲ問フ。

4月25日

(前略)九時過北郡筆生阿部某並藍結社人松山久兵衛岩淵久吉来ル。馬耕手續及藍教師雇入手順其外廉教師ノ事等種々問尋ネ済退出。(以下略)

4月29日

(前略)今朝伝習所ニ於テ紙面ヲ草シ南ノ産業係岩館方面耕手不足ナラハ本町菊池勘次郎へ手伝ノ事談置スルニ付速ニ可申付儀柳原へ菊池勘次郎ノ藍種子其ママニ捨置時県属信ヲ失フヘキニ付買上取計可然云々申送ル

5月4日

(前略)九時南郡役所へ出頭郡長並産業係へ馬耕伝習季節ヲ愆ラサル様注意スヘキ事ヲ談シ筆生天内豊ヲ波岡へ出張セシム十二時退下食事否ヤ同所ヲ発シ藤崎へ来ル笹勇柳原警察分署ニ居合要務ヲ協議シ笹森ハ桑井ヲ尋ネ余ト柳原ハ下宿白崎へ投宿ス。

5月8日

(前略)南郡吉野田ニハ馬耕教師不在ニ付未田預リノ山田某ヲ遣シ応援スヘキ事ヲ口助ニ談シ二時過柳原同道発程猫淵村ニ至リ土族一戸三平方ニ於テ藍麻栽培試験畑ヲ一見ス。北郡書記樋口光外口裁

培教師等皆同家ニアリ乃チ器械等ヲ一見シ一戸案内シテ畑地ヲ一見シ又馬耕助手ノ演業ヲ一見シ豪家湊村平山某方ニ投宿ス。一戸三平並柳原氏ノ長男小平太モ同シク来ル。小平太ハ馬耕授業師ニシテ白口板ヤ野木方面ヲ受科ス。

当村ニテハ麻栽培製造改良セン為メ一戸三平首唱ニテ豪農ナト一社ヲ結合シ県庁ヨリ雇入タル栃木県ノ農夫三名ヲ内大畑モア引受三十円一株十八株ヲ以資本トシ畑地ヲ借入レ奮発従事セル也外ニ馬耕授業師並助三名皆此ヲ根居トセシ故藍制並栽培モ試験セントテ苗畑ヲ多ク仕付タリ。

5月28日

(前略)余ハ吉田ト同道シテ藤崎ニ至リ白崎貞助方ニ入り戸長ヲ喚出ス。病氣ニ付代理来ル。藍栽培並馬耕大略ノ事ヲ問ヒ藍製篤志人清水利兵衛ヲ喚ハシメ藍製習受ノ順序ヲ問ヒ教師桑井貫二ヲ喚ヒ其景況ヲ問フ。談時ヲ移ス。三時過藤崎ヲ発シ六時頃黒石着。(以下略)。

6月9日

(前略)馬ヲ雇八時過櫛引ヲ発シ五林平村米田慶助へ立寄里程帳ヲ記シ北郡馬耕ノ状ヲ問ヒ暫時ニシテ同所ヲ発シ十二時板屋野木ニ達ス。櫛引ヨリ借廻合羽並旅亭ニテ午食シ藍教師吉田阿部久兵衛ノ前縁業者年三十余名トシテ月給五円ニテ雇入ニ逢ヒ藍栽培ノ景況ヲ問同道シテ畑地ヲ一見シ夫ヨリ同村出入ノ者 寅吉方へ行袴綻ヲ縫ハシメ青女子村ニ渡リ雇館山俊吉方へ行馬耕塊搔ノ景況ヲ問ヒ同人長男ト同道シ畑地ヲ一見シ又板屋野木へ渡リ(此川原ニテ偶土段落数箇ヲ拾ヒ得タリ)夫ヨリ藤崎へ来リ旅宿ニ投ス時五時過ナルヘシ。昨日ヨリ経過スル処塊搔挿秋田野人馬繁ク此頃ノ降雨ニテ水溝洫ニ満ツ又畑所ノ村落ハ到ルトコロ藍ヲ種ルモノ多ク農家ノ勿々タル人馬ノ休スルモノアルヲ見ス。

6月10日

(前略)九時過藤崎ヲ発シ途中木村長徳ニ追付慈雲院地買入ノ事ヲ相談シ別レテ先キニ出ツ。堅田村ニテ弘前ニ来ル桑井貫二ニ追付藍苗栽培ノ話ヲ聞キ別レテ下宿ニ着ス。(以下略)

6月16日

(前略)北原氏ニ行キ藤崎板ヤノキ辺へ県立試験所藍床ヲ開ク事ヲ柳・北・兩名ニ懇瀆ス。暫時ニシテ予ハ辞シ去ル。(以下略)

6月22日

(前略)七時過前田甚三郎平野清助前田作平等ト同道藍結口等ノ畑ヲ一見シ又甘藷苗煙草苗ノ床ヲ一見シ下宿ニ帰ル (以下略)

6月28日

(前略)藤崎警察署ヘ立寄一等巡查赤塚治持ニ過ヒ笹勇ノ書状ヲ渡シ又藤崎藍会社ノ内事情ヲ問ヒ四時過弘前着 (以下略)

7月27日

(前略)本日途中藍教師桑井貫ニ逢ヒ藍生育ノ景況ヲ問ヒ並弘前博覧会へ出品スヘキヲ話ス。

8月17日

(前略)柳原ハ試験場ナキノ故ヲ以延日ノ所存アリ故ニ同道シテ南塘ヲ一見セシテ是モ藍ノ二番取ノ為不都合ナリ。(以下略)

8月28日

(前略)糸谷利三郎製藍伝習希望有無問合ノ事等ヲ談シ (以下略)

8月29日

(前略)糸谷利三郎製藍伝習受サル旨ノ申出有之ト笹森ノ談アリ。(以下略)

8月30日

(前略)弘前糸谷利三郎方ニ至ル不在郡役所ニ至製藍並内博覧会ノ事等ヲ産業係ニ談シ谷口等同道シテ慈雲院開墾地ヲ廻歩シ日暮下宿ニ帰ル

8月31日

(前略)八時過藤崎ニ至ラント郡役所ニ立寄製藍者ノ目的ヲ問フニ未決ノ由乃チ博覧会出品目録調製ノ質問ヲ受ケタリ。(以下略)

9月1日

(前略)八時過郡役所ニ至ル。吉田氏来着ノ談アリ。乃チ其止宿ニ至リ面会シ藤崎製藍ノ件並南部地方製糖一見ノ事等相談アリ。(以下略)

9月6日

(前略)郡役所ニ至リ高瀬氏製藍伝習ヲ受ルコトニ付キ其目的確實ナリヤ否ヲ産業係ニ質シ (以下略)

9月8日

(前略)午後郡役所ニ至リ産業係ニ緑屋並高瀬氏藍伝習ヲ受ルヤ否ヤヲ問ヒ (以下略)

9月10日

(前略)朝私宅ヲ発シ藤定ニ至リ夫ヨリ吉田氏ノ下宿ニ行要務ヲ議シ 製糖ノ事ニ付三戸郡行ノ事産馬ノ事ニ付南郷巡回ノ件、製藍伝習ノ事ニ付板ヤノ事五林平巡回ノ件、陸部伊平場 県ノ 製糖ノ事ニ付三戸郡行ノ事産馬ノ事ニ付南郷巡回ノ件、製藍伝習ノ事ニ付板ヤノ事五林平巡回ノ件、陸部伊平場 性等。(以下略)

9月11日

(前略)成田 ヲ呼ヒ製藍伝習ノ事ニ付其手續ヲ問ヒ且申談了リ、同所ヲ発シ板ヤ野木ニ至ル藍ノ授業師吉田巖ニ逢ヒ松山久兵エヲ下宿ニ呼ヒ製藍伝習受ノ手續ヲ問ヒ且申談了リ。(以下略)

9月12日

(前略)松山久兵エ並吉田巖ト共ニ板ヤ野木農会社ノ畑地ニ裁付タル琥珀甘藷ノ成熟ヲ一見シ板屋野木村ヲ発シ五林平村米田慶助方ニ至リ製藍法伝習受クヘキヤ否ヤ且馬耕教師明年居残ノ数見込問ヒ又製糖法実見ノ為南部地方発程ノ都合ヲ尋ネ同所ニテ午食。(以下略)

10月24日

(前略)七時過同氏 [北原氏] 来リ藍製造師桑井貫ニ送ル月給金二十五円一包届方依頼アリ (中略) 一時過午食シ藤崎ニ至リ警察分署ヘ立寄又桑井貫ニ宿所ニ至同人ノ他呼返サセ北原ヨリ依頼ノ月給包貨幣ヲ渡ス。(以下略)

上記の記述に名前が出てくる中で、清水利兵エとは、清水理兵衛のことと思われる。後に明治22年に市町村制が施行された際に藤崎村初代村長を務めた人物であり、産業や教育など各方面において、地域の指導者的役割を果たしていた。明治18年に洗礼を受けており、敬けんなクリスチャンとしても知られる。また、成田保次郎も、藤崎村の戸長をつとめた人物である。板屋野木に農会社をもち、「藍結社人」として名前が出てくる松山久兵エは、現在板柳町の産業に指導的役割を果たした松山久兵衛のことであろう。同地にリンゴを初めて移植したり馬鈴薯の導入、砂糖の製造など、事業を展開する一方で、教育にも功労有った人物として知られている。

ここに抜粋した記述の中には、きわめて興味深い事柄が多く含まれている。たとえば、県の勸業

政策の一端を具体的に伝えていることもそのひとつである。徳島から桑井貫二という人物を招聘したことはこれまで知られていたが、彼が甥に当たる吉田という人物も同伴してきたこと、また、「板屋ノ木」の松山久兵衛は農会社を組織しており、藍にもきわめて熱心で、桑井に付いてきたこの吉田は松山の会社で月給5円で働いていたこと、さらに、この近くには、県立試験所設立の動きがあったこと、などは、従来ほとんど知られていなかったことである。また、藤崎でかなりの影響力を持った清水理兵衛は「藍製篤志人」として記述され、きわめて藍に力を注いでいたことも判明する。

明治期の藤崎で藍が盛んに栽培されていたことは、まとまった記述としては『藤崎町誌』があるが、その他にも、藤崎町のキリスト教関係の教会史²⁰⁾、あるいは岡部一興の研究²¹⁾にも若干の記述が見受けられる。しかし、この長尾介一郎日記はそれらによって知られていた事実の範囲を大きく超えて我々に当時の実状を伝えてくれる。藤崎だけではなく、板柳や弘前にも関連した動きがあったこと、藍の結社も結ばれ、会社も作られていたこと、「藍製篤志人」とよばれる人物もいたことなどは、これまであまり知られていなかったこの地方の藍産業化への取り組みの具体的な姿を伝えてくれるものである。また、公的な県の勸業政策の一環も伝えており、さらにはその任を受けた介一郎が、毎日各地に足を運んで産業開発に努力する姿も浮かび上がってくる。言を重ねるが、きわめて興味深い史料であり、今後さらに関連する動きの中での検討が必要なものでもあると考えられる。

結びにかえて

これまで明治13年の長尾介一郎日記を中心に、藍産業化への試みについて述べてきた。その後の動きについては、稿をあらためて述べる。よく知られている通り、明治27年頃からインドの藍やドイツの化学染料が入ってきたことから、藍は衰退の一途をたどり、最も盛んであった藤崎でも明治33年には全廃したと伝えられる²²⁾。しかし、たとえば、明治35年2月4日の『東奥日報』には、弘前市茂森26番地の元木榮太郎という人物が、「葉藍」と「藍玉」を販売している広告が掲載されている。化学染料が普及し始めても、わずかながらでも、藍を使用している人々もいたのだと思われる。皮肉なことに、安価な化学染料が行き渡って、

天然の藍がすたれてしまった後、弘前新聞に藍に関する記事が掲載された。それは、当時の織物が色の見栄えする物が多いものの、一度洗うと変色してしまうことを歎いて、次のように述べている。

(前略) 十年以前までは、我津軽の村々で、藍を植えて在る所は多かつた、故に紺屋では自ら村々へ買ひに廻つたもので有つたが、今は殆んど其跡を絶ちに至つたのも、畢竟安い独逸染料の為に押されたので有ろう、実に悲しい、よし地方の藍は化学染料より高い事は当り前だが、夫れ丈亦変色せぬ強みを有つて居るから、實際は高い訳でも有るまい。尚且つ地方の金を地方に落す事であるから、我国としては頗る有利た。(中略) 日本人は日本の米を喰ふて、日本の産物を他国へ売る様にすると共に、津軽人は津軽の米を喰ふて津軽の産物を他所へ売る様に努力せぬと、国利民福と云う言葉は仇に文字や口に並へられて斗りて現実に用いられる事に無くなつて仕舞ふ、全く残念だと思ふ、此間菊池楯衛翁は、津軽藍の絶滅した事を慨嘆して、津軽の各村に藍を植えることを奨励して居ると云われた、徳島県から藍の種子を一石取寄せると三十五円た相たから、一村に一合宛分けて遣るとしても、随分広きに渡るであらう。昔は安房一國の藍が全国の織物を染めた程の産出で有つた相だた、今では安房一國分の染料も覚束ないと云われて居るが、今度は翻つて又元の如く産出格を高めると云ふ事だから、我津軽も昔の強い手織を着る精神で、ドシドシ藍を植えられるものた²³⁾。

大正期にすでに天然の津軽藍への復帰を訴えていたもので、津軽藍の歴史を考えるうえではきわめて興味深いものである。津軽の藍については、従来ほとんど研究されてこなかった。しかし、本稿で述べたような諸史料は、藍に関して一般に語られる通説が形成された中で切り捨てられてきた、多くの動きを伝えるものであろう。今後とも史料発掘に努め、かつて産業振興の大きな要素であった津軽の藍をめぐる諸相を明らかにしていく予定である。

付記 本稿は、本学教官北原晴男、肥田野豊らによって設立された津軽藍研究会の歴史部門にお

ける研究成果であり、資料収集を宮本利行、執筆を北原かな子が担当した。

注

- 1) 兼松成一氏は弘前藩学校最後の篤学で、東奥義塾開校時、学校長に当たる幹事を勤めた兼松成言の子孫に当たり、成言の娘、リカが長尾介一郎に嫁くなど、姻せき関係にあったことが、この資料の発見につながったという。
 なお、この長尾日記については、兼松成一「長尾介一郎日記を中心に長尾家文書類」『東奥義塾史報』第2号（東奥義塾高等学校、1997）、兼松成一「長尾介一郎日記が捉えている明治の事件真相」『東奥義塾史報』第3号（東奥義塾高等学校、1998）で紹介されているほか、『青森県史 資料編 近現代1 近代成立期の青森県』においても、明治14（1881）年10月28日から明治15（1882）年12月5日にわたって、弘前事件関係部分に掲載されている。（青森県史編さん近現代部会『青森県史 資料編 近現代1 近代成立期の青森県』（青森県発行、2002）pp.354-357）
- 2) このことについて、葛西音弥は次のように書き残している。（尚、引用に際し、旧字体を新字体に改め、句読点を加えた）
 （前略）余藩学稽古館の凌夷し稍時勢に後るるやの慨嘆なき能はず大に爲す有らんとするの士を養成せんと欲す。乃ち私に家老杉山上聴に議する所あり。明治2年7月駿州に至り我友中村正直を聘用せんとす時に朝廷正直を徴す急なり応せず辞するに疾を以てするの際なり、謝して曰く僕は知らるる如く羸弱の軀幹、暫らく駿州に慣るるを旧郷江戸に帰るも猶欲せざるに況んや東奥寒國をや敢て謝すと徒手し帰れり。而して我が志決して翻すべからざるもの有り、上聴と再議し翌三年九月断然梶昌雄、長尾介一郎と共に再び駿州に至る（以下略）青森市市役所市史編纂係『青森市沿革史中巻』、1909、p.595
- 3) 笹森順造『東奥義塾再興十年史』（東奥義塾学友会、1931）p.20. に、明治5年から10年まで教育を担当した職員として、長尾介一郎の名がでてくる。
- 4) 明治九年六月十七日
 宮館村領の内紺青色之如き土の出る処有是珍敷一品土悴〔介一郎〕等兼々分析用方可有之歟と申居たり（中略）今度青森江御巡幸之節北岡博覧会相開候と申ニ付可差出心得ニて大道寺区長北岡有格義塾教師エング夫婦其外生徒等実地踏査の爲め同村江来れり（「津軽長尾日記抄」函館図書館所蔵史料）
- 5) 宮本利行、北原かな子、肥田野豊、北原晴男

「青森県における土族授産と津軽藍産業化への試み」『弘前大学教育学部紀要』87号、弘前大学教育学部、pp.89-98.

- 6) なお、この件については、『藤崎町誌』にも、「御用留」から転載された以下のような記述がある。
 其御郡藤崎村藍栽培製造方改良之儀ニ付、同村成田保次郎ヨリ出願ノ趣モ有之、授業師雇入之儀高知県へ及依頼置候処、今般阿州徳島町名藍社員、桑井貫二ナル者致来着候ニ付、藤崎村へ配置之積ヲ以本日出起為候、就テハ課員長尾介一郎儀同村へ出張被命候ニ付、同人ヨリ及御協議候事モ可有之、其際ハ不都合無之様御取斗有之度、此段及御照会候也 明治十三年四月十九日 第二課（印）
 南津軽郡長 唐牛桃里 殿
 『藤崎町誌』第二巻（近代）（藤崎町、1996、pp.183-184）
- 7) 3月11日（前略）九時出庁二時否や申合退下否ヤ義塾（ママ）へ行キ約束ノ如ク菊池氏同道ニテ山野氏へ立寄又山野氏ヲ伴ヒ慈雲材木ノ景況ヲ一見シ隣地ニテ義塾生徒等結社シャボン製造セシ所ニ立寄り（以下略）
- 8) 3月16日、4月8日、4月22日、7月24日、8月29日、9月7日の条など。
- 9) 4月23日の条
- 10) 4月26日の条
- 11) 4月29日の条
- 12) 6月1日の条
- 13) 7月5日の条
- 14) たとえば10月21日の条
- 15) 10月23日（前略）今朝菊池九郎郡役所へ尋来リ開墾地ノ事並製糖ノ事ヲ話シテ帰ル。
 10月25日（前略）菊池九郎氏ヲ訪ヒ（中略）製糖法出版ノ原稿ヲ渡シ（以下略）
 10月30日（前略）義塾へ行（中略）工藤民次郎今宗蔵等ニ会ヒ製糖法活版摺ノ事並函館記行ノ投書工藤行幹養子造口之丞ノ事等ヲ話シ日没前下宿ニ帰ル
 11月26日（前略）真文舎ヲ訪ヒ伊東祐胤ニ逢ヒ製糖法活版ノ事ヲ依頼シ下宿ニ帰ル（以下略）
 12月16日（前略）本多庸一ニ簡シ製糖法活版摺ノ事ヲ問合タル処同人来リ青森活版所ノ事情委シク話アリ乃チ出版届ケ等ノ事ヲ依頼シ同人承託シテ去ル（以下略）
 12月17日（前略）午後本多庸一ヨリ製糖法出版御届ニ付予カ捺印ヲ取ルニ使アリ（以下略）
- 16) 8月13日（前略）福士某ノ製茶ヲ一見ニ行ク同人当4月県庁ノ紹介ヲ以テ静岡ニ行製茶法ヲ伝習セリ故ニ一見ノ事申出アリ。
- 17) 10月の項、日付不明

- 18) 拙稿「青森県における士族授産と津軽藍産業化への試み」『弘前大学教育学部紀要』87号（弘前大学教育学部）参照のこと。
- 19) なお、引用に当たっては、漢字の旧字体を新字体にあらため、必要に応じて句読点を補った。また、介一郎日記は毎日冒頭に天候などの記述があるが、本稿では省略した。
- 20) 「藤崎教会創立九十周年記念誌ニュース」1976年10月10日号掲載の佐藤勝三郎の伝記など。
- 21) 岡部一興「明治期におけるキリスト教受容」(『経済商学研究』第六号、明治学院大学大学院経友会、1972、pp.1-18)
- 22) 藤崎町誌編さん委員会編『藤崎町誌』第二卷(近代)（藤崎町、1996、pp.180-181.
- 23) 「光れ藍玉」『弘前新聞』大正5年5月15日。
(2003.1.16受理)